移動による前置詞後置について

荒　川　和　子

1.

英語の関係詞構文，疑問文，受身文などにおいては，1のように前置詞が後に残されることがある。

(1) **a**. The old house which I was telling you *about*[1] is empty. (Quirk *et al.* 1972, p. 300.)[2]

b. Which house did you leave it *at*? (*Ibid.*)

c. This matter will have to be dealt *with* immediately. (*Ibid.*, p. 805.)

本稿ではおもに関係詞構文と疑問文のなかで前置詞が後に残されている文を取り上げ，言語資料と照らし合わせて，それらの文をどのように生成させるかという問題を考えてみたい。

2.

近年，英語以外の言語についても生成文法理論の観点からの研究が盛んに行なわれ，その研究成果を踏まえて改めて英語の分析を見直すということがよく行なわれている。前置詞の後置に関する研究もそのひとつである。Riemsdijk (1978) は，フランス語，ドイツ語など多くの言語において前置詞が後置している文は全て非文であり，その点では，英語はきわめて例外的な言語であるという興味深い見解を述べている。さらに，英語においても全ての場合に前置詞の後置が許されないことを示す例として，2と3を提示している。

(2) **a**. *What did they leave *notwithstanding*? (Riemsdijk 1978, p. 145.)

b. *This is the journalist that Bill resigned *according to*. (*Ibid.*)

c. *Which break should we leave *during*? (*Ibid.*)

(3) **a**. I can't talk about these things to my father-in-law. (*Ibid.*, p. 146.)

b. *I can't talk *about* to my father-in-law the horrible dreams I've been having recently. (*Ibid.*)

2においては *wh*-移動変形，3においては複合名詞句転移変形がそれぞれ適用された結果，前

(1) 以下後置されている前置詞はイタリック体で表わす。

(2) 以下出典は略語で記し，論文末に正式な出典を掲げる。

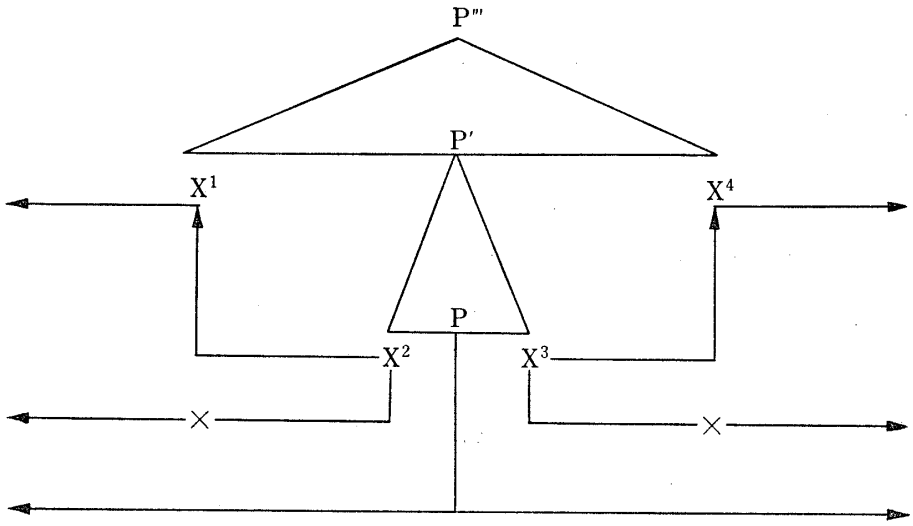
置詞が後に残されている。一般に，前置詞句から要素を取り出すことができないという事実は，主要部制約により説明ができると Riemsdijk は主張している。

（4） The head constraint

No rule may involve X_i/X_j and Y_i/Y_j in the structure...X_i... $[_{H^n}$... $[_{H'}$...Y_i... H...Y_j...$]_{H'}$...$]_{H^n}$...X_j... (where H is the phonologically specified (i. e. non-null) head and H^n is the maximal projection of H) (*Ibid.*, p. 160.)

この制約により，図5において P′ の中にある X_2, X_3 を一回の操作で P‴ の外に移動させることが阻止されることになる。

（5）



(*Ibid.*, p. 160.)

一方，前置詞が後置されている1のような文を生成するために，Riemsdijk は英語の句構造規則の一つとして6を提案している。

（6） P‴→COMP P‴ (*Ibid.*, p. 227.)

そこで，1の前置詞句は6により生成されると仮定すれば，前置詞句の要素はまず P‴ の中にある COMP に移動できるので，主要部制約を破らずに P‴ の外に移動ができることになる。このように，Riemsdijk の枠組では，*wh*-移動変形による前置詞句からの要素の摘出の可能性は前置詞句が6により生成されたか否かに拠る。これは前置詞の後置の可能性は，個々の前置詞の特性に帰せられるという立場に立つことになる。言い換えれば，*about, at, with* 等が後置できるのに対し，*notwithstanding, according to, during* 等が後置できないのは全く予測されない事実であると主張していることになる。他の原則からこの事実が導びきだせればその方が望ましいのは言うまでもない。

3.

Hornstein & Weinberg (以下 H & W と略す) (1981) は，英語において前置詞を後置できるのは有標の言語事実であるという Riemsdijk の主張を認めた上で，Riemsdijk とは異なる分析を提案している。彼らの分析の特徴は，前置詞が後置される可能性を前置詞句が文の句構造に占める位置に関連づけている点にある。具体的には，格付与規則の一部として7を設定し，さらに7b で [+oblique] と指定され，かつ語彙要素を持たない名詞句 [NP e] を排除するために普遍フィルター8を提案している。

(7) **a**. NP is marked [+objective] if it is governed by V.
b. NP is marked [+oblique] if it is governed by P. (H & W *op. cit.*, p. 61.)

(8) $*[_{NP}\ \underset{oblique}{e}\ ]$ (*Ibid.*, p. 60.)

この二つのしくみにより，英語以外の言語において前置詞句から要素が摘出されないことが説明される。一方，英語においてある種の前置詞句からの要素の摘出が可能であるのは，英語には再分析規則9が存在するので，VP の中で V と V の右にある要素が一つの複合動詞にまとめられるからであるとしている。(3)

(9) V→V* (where V c-commands all elements in V*) (*Ibid.*)

7，8，9の適用段階に関しては，9は基底構造で適用され，7はすべての変換規則のあとで適用され，フィルター8はさらにそのあとで適用されるという。それでは10の非容認可能性がこれらのしくみによりどのように説明されるかを見ていくことにする。

(10) *What time did John arrive *at*? (*Ibid.*, p. 56)

(11) $\left[_{S}\ \text{John Past}\ \left[_{VP}\ [_{V}\ \text{arrive}]\right]\ [_{PP}\ \text{at what time}]\right]$

10の基底構造11において，*at what time* は VP の外にあるので再分析規則9は適用されない。従って，*wh*-移動規則が適用されたあと，*what time* の痕跡は 7b により [+oblique] の指定を受け，12が生成される。

(12) what time John Past arrive $[\underset{oblique}{at\ \ t}\ ]$

これはフィルター8により排除されることになる。次に，前置詞が後置されている13の例について見ていくことにする。

(13) Who else would you talk *to*? (PT p. 159.)

13の基底構造は，概略，14のようであると考えられる。

(14) you Past will $\left[_{VP}\ [_{V}\ \text{talk}]\ [_{PP}\ \text{to who else}]\right]$

14には9の再分析規則が適用でき，*talk to* は15に示されたように複合動詞を形成する。

---

(3) Riemsdijk (1978 : 218–223) も NP-移動規則の入力構造には，再分析規則が適用されるとしている。

(15) you Past will $\left[\underset{VP}{[\underset{V*}{\text{talk}}\ \text{to}]\ [\text{who else}]}\right]$

従って，*wh*-移動規則により残される *who else* の痕跡は，前置詞 *to* ではなく，V に統率され，7a により［+objective］の指定を受けるので，フィルター8によっては排除されないことになる。

4.

以上，前置詞句からの *wh*-移動の結果，前置詞が後に残される文の扱い方についてなされた二つの提案を見てきたわけであるが，次に，それぞれの提案の妥当性について考えてみたい。

まず，二つの分析は，前置詞が後に残されている文の派生句構造について異なった予測をする。Riemsdijk の分析では *wh*-移動規則への入力構造のためには再分析規則を設定しないので，前に例として取り上げた13の派生句構造は，概略，16のようになる。

(13) Who else would you talk *to*?

(16) who else would you $\left[\underset{VP}{[\underset{V}{\text{talk}}]\ [\underset{PP}{\textit{to}}\ \text{t}\ ]}\right]$

一方，H & W の分析では，再分析規則が適用されるので17となる。

(17) who else would you $\left[\underset{VP}{[\underset{V*}{\text{talk}}\ \textit{to}]\ \text{t}}\right]$

この問題について H & W は，13のような文におけるかきまぜ規則の適用の可能性に関する事実から，16ではなく17が正しい派生句構造であると論じている。かきまぜ規則は姉妹節点の順序を入れ換える規則であり，例えば18を19に変える働きをする。

(18) Sam $\underset{VP}{[\text{talked}}\ \underset{PP}{[\text{to Harry}]}\ \underset{PP}{[\text{about John}]]}$

(19) Sam $\underset{VP}{[\text{talked}}\ \underset{PP}{[\text{about John}]}\ \underset{PP}{[\text{to Harry}]]}$

従って，動詞と後に残された前置詞が複合動詞を形成しているならば，かきまぜ規則の適用により動詞と前置詞の間に要素が介在することはないことが予測される。この予測を裏付ける事実として，H & W は20を提示している。

(20) Who did John talk $\begin{Bmatrix}\text{*regularly}\\ \text{*hysterically}\end{Bmatrix}$ to Fred $\begin{Bmatrix}\text{*regularly}\\ \text{*hysterically}\end{Bmatrix}$ *about*?

(H & W *op. cit.*, p. 62)

このように，動詞と後に残された前置詞の間に要素が介在しないということが全ての場合に成り立つならば，再分析規則を設定する H & W の分析の方が正しいということになるが，実際は，要素が介在しているのにもかかわらず容認可能な文が存在しないわけではない。例えば，Inada (1981 : 125) は Bresnan (1980) からの引用例として21を指摘している。

(21) **a**. That's something that I would have paid twice *for*.
b. These are the books that we have gone most thoroughly *over*.

同様の例として筆者の調査した言語資料から22が挙げられる。

(22) **a**. "Perhaps she can understand that this is a subject which I, like most commercial flying crews, feel strongly *about*." (A. Hailey A p. 166.)
b. They are the very sort of thing that the Senate is going to be looking most *for*. (PT pp. 107-108.)
c. What I am coming in today *with* is: I don't have a plan on how to solve it right now... (*Ibid.*, p. 119.)
d. Well, I started out by saying that the subject was so difficult for you to talk to him personally *about* that you had asked me to do this. (*Ibid.*, p. 287.)

21，22の文は，再分析規則9により動詞と前置詞が複合動詞を形成するという分析の反例となる。さらに事実を調査する必要があるが，現在のところ，動詞と後に残された前置詞の派生句構造に関しては，Riemsdijk の分析の方が正しい予測をしているように思われる。

Riemsdijk と H & W の分析のもう一つの違いは，前者が文の基底構造のどの位置に前置詞が生成されるかという情報を全く用いない分析であるのに対し，後者はそれに基づいた分析であるという点にある。この相違は，前述の派生句構造についての分析の場合とは異なり，一方が正しければ他方は必ず間違っているという種類のものではない。従って，もし VP に直接支配された前置詞句からのみ要素の取り出しが可能であるという H & W の主張が正しければ，何らかの形でそれを Riemsdijk の枠組の中に取り入れることは不可能ではない。

以下で彼らの分析の妥当性を検討していくが，これはそれほど容易なことではない。というのは，現在のところ，英語の句構造の研究がまだ完了していないからである。そこで，Chomsky (1965) によって提案された英語の句構造規則の試案を指針として，言語事実を調べていくことにする。Chomsky はある要素が VP に支配されているか否かを決める基準として，今日まで多くの研究で利用され，また H & W 自身も用いている一つの原則を提案している。それは，VP に支配される範疇記号のみが V の厳密下位範疇化に関与するというものである。この原則に従えば，ある要素が動詞の下位範疇化に関与していれば，その要素は VP に支配されていなければならないということになる。この原則に従って Chomsky (1965 : 106-107) は英語の句構造規則の一部として23を挙げている。

(23) **a**. S → NP $\frown$ Predicate Phrase
b. Predicate Phrase → Aux $\frown$ VP (Place) (Time)
c. VP → V (NP) (Prep Phrase) (Prep Phrase) (Manner)

d. Prep Phrase → $\left\{\begin{array}{l}\text{Direction}\\ \text{Duration}\\ \text{Place}\\ \text{Frequency}\\ \text{etc.}\end{array}\right\}$

23の句構造規則は前置詞句からの *wh*-移動の結果，前置詞が後に残される文を説明するために特に設定されたものではない。従って，もし23の句構造規則により生成される前置詞句からの要素の摘出の可能性が H & W の分析の予測通りであれば，独立の根拠が Chomsky の23の分析に与えられたことになる。一方，もし予測通りでなければ，句構造規則23と H & W の分析のいずれか，あるいは両方の修正が必要となる。

4.1.

本節では時の前置詞句からの摘出の可能性を検討する。動詞は，例えば名詞を取るか否かにより他動詞と自動詞に下位区分されるようには，時を表わす表現によって下位区分されない。従って23で示されるように VP の右辺に Time を展開しないのは妥当な分析である。実際，今日までに提案された句構造規則の中で VP の右辺に時を表わす表現を展開しているのは，筆者の知る限り皆無である。H & W 自身は Time は S によって支配されるという立場をとり，VP 内でのみ再分析規則が適用されるという彼らの分析を支持する証拠として24の文を示している。

(24) **a**. *What time did John arrive *at*? (H & W *op. cit.*, p. 56.)
b. *Which day haven't you eaten *since*? (*Ibid.*, p. 89.)

さらに Ross (1967 : 119) も同じような事実を指摘している。

(25) *What time did you arrive *at*?

しかしながら，H & W も指摘しているように，*on what day* の場合は，前置詞が後ろに残されていても容認可能な文が存在する。

(26) What day did John leave *on*? (H & W p. 79.)

この点について彼らは26に比べて容認可能性の低い27を例示し，26のような単純な文の場合は，文法では非文とされても，文の認知のしくみにより，容認可能性の高い文となるという説明をしている。

(27) **a**. ??What day didn't John take the car *on*? (*Ibid.*)
b. *It was Sunday that John left for Europe *from*? (*Ibid.*)

一方，Quirk *et al.* (1972 : 864) も28のようなパラダイムを指摘しているが，28の…の位置に起こるものの例として挙げられている語句は *he was born* である。

(28) The day on which...
which...on

26—28から推測されることは，*on* が後置できるか否かは，文中に表われている述部表現の意味内容と関係があるということである。つまり，単独では情報量が不足していて，出来事が起こった時或いは場所についての情報を伴なう方が自然であるような述部表現の場合に *on* が後置できると考えられる。もしこれが正しいならば，一つの可能性として，VP に支配されていない前置詞句であっても動詞との関係が“密接”であれば，要素の摘出が可能であるという方向で，H & W の分析を修正することが考えられる。また，同時に，時の前置詞句を VP に支配させる可能性についても検討する必要がある。

4.2.

次に，様態を表わす前置詞句と手段・道具を表わす前置詞句について考えてみることにする。これらの表現は行為者を主語に持つと解釈できる動詞とのみ共起できると考えられるので，動詞の下位区分に係わっているとみなすことができる。従って，先に紹介した Chomsky の原則によれば，これらの前置詞句は全て VP の内部に生成されることになる。はじめに，様態を表わす前置詞句についてみていくことにする。Jespersen (MEG III : 188) は Sweet (1891-98) からの引用として，口語においても *with* が後置されない例として29を挙げている。

(29) **a.** Observe the dignity with which he rises!
b. *Observe the dignity which he rises *with*!

Quirk *et al.* (1972 : 815) も 30a の *assurance* を問う疑問文として 30b は用いられないことを指摘し，Jespersen と同じ主旨の観察を行なっている。

(30) **a.** She spoke with assurance
b. *What did she speak *with*?

一方，Ross (1967 : 119) は31の例を示して，*manner* が先行詞の場合は *in* が後に残されないことを指摘している。

(31) **a.** The manner in which Jack disappeared was creepy.
b. *The manner which Jack disappeared *in* was creepy.

さらに *in...way* の場合についても，自然な会話文を記録した言語資料である *A Corpus of English Conversation,* 並びに *The Presidential Transcripts* を調査した結果では，*in* が後置されている例は一つも無いので，この前置詞句についても前置詞は後置されないと判断するのが妥当であると思われる。32は前者の資料から取ったものである。

(32) **a.** ...we'll have to sort out what we're going to do this summer because there's a way in which I can wangle a lot of time off (CEC p. 707.)
b. the old way in which one moved across England by train... (*Ibid.*, p.837.)

このように，様態を表わす前置詞句からの要素の摘出は許されないのが普通であるが，唯一の例外は受身の行為者を表わす *by*-phrase である。

(33) **a**. By which boys were the girls asked questions?
b. Which boys were the girls asked questions *by*? (Bresnan 1978, p. 48.)

33b で示されるように前置詞 *by* を後に残しておくことが可能である。以上述べた事実を H & W の分析との関連において整理すると，彼らの分析は受身の行為者を表わす *by*-phrase については正しい予測をするが，他の三つの種類の様態を表わす前置詞句については，前置詞を後に残すことができるという誤った予測をする。Chomsky により提案された VP の内部構造についての原則を修正すべきであるのか，それとも何らかの制限を再分析規則に設定すべきであるのか，今後の課題としたい。

手段・道具を表わす前置詞句 *by* NP, *with* NP からは，H & W の分析が予想する通り要素を取り出すことができるので問題はない。

(34) **a**. Frances had managed to bully the Department of the Environment woman (who was extremely pretty for one so neurotic) and one of two other stray possibilities into a game of poker, though they hadn't got much beyond the stage of arguing about the rules they were playing *by*. (M. Drabble RG p. 234.)
b. "He's supersensitive about how he looks because he knows that's one of the things people judge you *by*. (*Newsweek* January 9, 1984, p. 24.)

(35) **a**. What did he write it *with*? (Leech & Svartvik 1975, p. 91.)
b. a knife (which) I can cut off the apple *with* (Jespersen *op. cit.*, p. 189.)

4.3.

次に方向を表わす前置詞句について考えることにする。Chomsky (1965 : 102) が方向を表わす前置詞句として例に挙げている *into* NP については，36において示されるように，要素を取り出すことが可能である。

(36) **a**. If Kennedy knew the trap he was walking *into*-(PT p. 89.)
b. It has nothing as a lot of these things that they should stumble along *into* is irrelevant. (*Ibid.*, p. 92.)
c. The trap you're falling *into* there is that you're admitting to Dean that you regard the allegations that he has raised against us as of the same validity of his own criminal admission to you. (*Ibid.*, pp. 539-540.)

一方，方向を表わす前置詞句が動詞の下位範疇化に係わるか否かという問題に関して，Chomsky (1965 : 102) は37，38に示されるパラダイムを示して，動詞の下位範疇化に係わっていることを指摘している。

(37) dash-into the room
remain-in England
(38) *dash-in England

*remain–into the room

従って，前述の VP 内部構造に関する原則に従えば，*into* NP は句構造規則により VP の内部に生成されることになるので，36に示される事実は H & W の分析を支持するものである。また，39—42の例は方向を示す他の前置詞句からも要素が摘出されることを示している。

(39) The road they were walking *along* rose steeply: it was a hilly district. (M. Drabble NE. p. 236.)

(40) the hill which he ran *down* (Jespersen *MEG* III p.190.)

(41) **a.** The boy that the dog ran *towards* (Quirk *et al. op. cit.*, p. 865.)

b. She honestly couldn't tell whether it was the depth of her being that she fell *towards,* at such moments, or whether it was some squalid muddy intersecting gutter or canal, from which she would struggle wisely back to dry land. (M. Drabble RG p. 14.)

(42) **a.** She'd been driving the children up to Hugh's and Natasha's, sitting in the kind of daze she always sat in while driving, and had stopped at a crossroads in one of the last villages they passed *through*. (*Ibid.*, pp. 238–239.)

b. I stared at the names of the places we were to go *through,* filled with rapture at the thought of all those unwinding miles. (M. Drabble W p. 177.)

4.4.

本節では，期間を表わす前置詞句について検討することにする。Chomsky (1965 : 102) は43のパラダイムを示して，期間を表わす前置詞句も，方向を表わす前置詞句と同様に，動詞の下位範疇化に係わることを指摘している。

(43) **a.** last–for three weeks

b. *last–three times a week

従って，彼の枠組では，期間を表わす前置詞句は VP の内部に生成されるので，H & W の分析は期間を表わす前置詞句から要素を摘出することが可能であることを予測する。

調査した言語事実の中には44のような彼らの分析を支持する例も存在するが，一方では *during* NP の場合には，*during* は後に残されないことが Jespersen (MEG III : 189) 並びに Riemsdijk (1978 : 155) により指摘されている。

(44) Dinner that night was one of the most curious meals that Simon had ever sat *through*. (M. Drabble NE p. 338.)

(45) **a.** *The concert that John fell asleep *during* was quite enjoyable.

b. *Which concert did John fall asleep *during* (Riemsdijk *op. cit.*, p. 155.)

through と *during* がほぼ同義であるのにもかかわらず，このような相違があるのは，直観的には，前者の方が動詞と結合する力が強いからであるように思われる。このことは，*through* の場

合には，*come through, go through, live through, sail through* というイディオムが存在するのに対し，*during* には存在しないことにも示されている。動詞の下位範疇化に関与する要素は VP に支配されるという原則を堅持した上で，45に示される事実を H & W の枠組で説明するためには *during* NP は例外的には再分析規則の適用を受けないと述べなければならない。

4.5.

最後に，場所を表わす前置詞句を取り上げる。Chomsky は場所を表わす前置詞句を23の句構造規則により Predicate Phrase と VP の内部の二ヶ所で生成することを提案している。これは，Chomsky (1965 : 102-103) によれば，場所を表わす前置詞句が動詞の下位範疇化に係わっている場合とそうでない場合を区別するためである。

(46) **a**. John stayed in England.
　　 b. John lived (=inhabited) in England.
(47) **a**. John died in England.
　　 b. John played *Othello* in England.

46の *in England* は VP に支配されるが，47の *in England* は Predicate Phrase に支配されるとされる。この分析の一つの根拠として，46のような文においては，*England* を主語にして自然な受身文を作れるのに対し，47のような文においては，自然な受身文が作れないという事実を指摘している。

以上の Chomsky の分析を考慮に入れた上で，H & W の分析が正しく言語事実を予測しているか否かを見ていくことにする。Chomsky が例に挙げている *stay in* NP, *live in* NP については，彼らの分析の予測通り，*in* が後置されている例がたくさん存在する。

(48) **a**. You should see the places I've stayed *in* when I've been doing rep. (M. Drabble GY p. 41.)
　　 b. A prestige project of the intellect, as the amazing hotel they were going to stay *in* was a prestige project of a more earthy nature. (M. Drabble, RG p. 229.)
　　 c. : and her only interest in the hotels that they stayed *in* came from the quality of their menus. (M. Drabble NE p. 123.)
(49) **a**. His whole life–the clothes he wore, the car he drove, the way he spoke, the house he lived *in*–was an act of misrepresentation .(*Ibid.*, p. 138.)
　　 b. After he had left her, they had tried to explain to her that the Vassilious were exploiters, that the house they lived *in* belonged to just such a family, who charged them an exorbitant rent. (*Ibid.*, p. 146.)
　　 c. He watched the inside of her house, the rooms of it, the rooms she lived *in*. (*Ibid.*, p. 388.)

sit on NP における前置詞句については Chomsky は言及していないが，前置詞の目的語を主

語にして受身文を作ることが可能であるので，Chomsky の枠組では，この前置詞も VP の内部に生成されると考えられる。

(50) My new hat has been sat on. (Zandvoort *HEG* p. 54.)

51の *on* が後置されている例は H & W の分析が正しい予測をしていることを示す。

(51) **a**. Natasha laughed, shifting her position in her chair, in wriggling the toes of the foot she had been sitting *on*. (M. Drabble RG p. 198.)

b. 'Hello,' I said, and he said, 'hello' and patted the other arm of the chair, which I sat *on:* (M. Drabble, GY p. 140.)

次に，Chomsky の枠組では VP に支配されていないとされる前置詞句から要素が摘出されている例を見ていくことにする。言語資料提供者は，52a の *the crash* を主語にして作られた受身文は非文であるという判断をする。

(52) **a**. He died in the crash.

b. *The crash was died in by him.

従って，Chomsky の枠組では *in the crash* は VP ではなく，Predicate Phrase に支配されていることになり，H & W の分析は前置詞は後置されないことを予測する。53に示されるように，予想に反して，*in* を後置しておくことが可能である。

(53) 'I respect the organic,' he said, leaning over to touch the back of her hand, 'and if anyone starts using my corpse in any experiments, even if it's only to recreate the crash I died *in,* I shan't think much of it...' (M. Drabble W p. 145.)

さらに Riemsdijk (1977 : 145) が例示している54の例も H & W の分析に対する反例と考えられる。

(54) **a**. Which round did Rocky lose *in*?

b. Switzerland is the country that Germans buy many houses *in*.

H & W (1981 : 56) は 54a とよく似た例55を非文として挙げているので，さらに事実調査をする必要がある。

(55) *What inning did the Yankees lose the ball game *in*?

調査した事実の中で，VP に支配されていない前置詞句から要素が摘出したと考えられる例を以下に挙げておく。

(56) **a**. After all one does still have family links, kinship links, with the landscapes one's parents and grandparents were born *in*. (M. Drabble RG p. 99.)

b. Firstly, and briefly I hope, I don't think I could have slept with James if the house I did it *in* hadn't been technically mine. (M. Drabble W p. 130.)

c. **A**: the sort of heaviness the syrupiness comes from that particular type of grape their strength is derived from

d: [m]
A: the type of casks that [m] they're matured *in*. (CEC p. 718.)

以上，V の下位範疇に関与する要素は VP に支配されるという Chomsky の提案に基づいて設定される句構造規則により生成される前置詞句からの要素の摘出の可能性が H & W の分析により正しく予測されるか否かを考察した。H & W の分析に対する反例は二つの種類に分けることができる。一つは *during* NP のように VP に支配されていると考えられるのにもかかわらず，前置詞句からの要素の摘出が許されない場合である。もう一つの種類は Predicate Phrase に支配されていると考えられるのにもかかわらず，前置詞句から要素が摘出されている場合である。今後の課題として，H & W の分析と Chomsky の VP の句構造に関する提案の両方を修正する必要があるのか，或いは，いずれか一方の修正でよいのかを考えていきたい。

引用文出典

CEC=A Corpus of English Conversation. Svartvik-Quirk eds. CWK Gleerup Lund. 1980.
Drabble, Margaret. GY=The Garrick Year. Penguin Books. 1964.
Drabble, Margaret. W=The Waterfall. Penguin Books. 1969.
Drabble, Margaret. NE=The Needle's Eye. Penguin Books. 1972.
Drabble, Margaret. RG=The Realms of Gold. Penguin Books. 1975.
Hailey, Arthur. A=Airport. Bantam Books. 1968.
Newsweek. January 9, 1984.
PT=The Presidential Transcripts. A Dell Book. 1974.

参考文献

Bresnan, Joan W. 1978. A realistic transformational grammar. In Morris Halle, Joan Bresnan, and George A. Miller eds., Linguistic theory and psychological reality. Cambridge: The MIT Press.
Bresnan, Joan W. 1980. The passive in lexical theory. Occasional paper 7, Center for Cognitive Sciences, MIT.
Chomsky, Noam. 1965. Aspects of the theory of syntax. Cambridge, Mass: The MIT Press.
Hornstein, Norbert and Amy Weinberg. 1981. Case theory and preposition stranding, Linguistic Inquiry 12.1, 55–90.
Inada, Toshiaki 1981. Problems of reanalysis and preposition stranding. Studies in English Linguistics 9. 120-131.
Jespersen, Otto. 1909-1949. A modern English grammar on historical principles. Part III. London: George Allen & Unwin.
Leech, Geoffrey and Jan Svartvik. 1975. A communicative grammar of English. London: Longman.
Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1972. A grammar of contemporary English. London: Longman.
Riemsdijk, Henk van. 1978. A case study in syntactic markedness: The binding nature of prep-

ositional phrases. Foris Publications.

Ross, John Robert. 1967. Constraints on variables in syntax. Unpublished Ph. D. dissertation, MIT.

Sweet, Henry. 1891-98. A new English grammar. Oxford.

Zandvoort, R. W. 1957. A handbook of English grammar. London.